

緑の夜

森岡 正作

落鮎の

すつぱりと我が身脱ぎたき炎暑かな
遠泳の疲れも見せず水を脱ぐ
散骨の話にはかに緑の夜
信仰を違ふる人と氷菓舐む
極道に可愛いがられて熱帯魚
大西日抜け来し者らジョッキ干す
痩せ畑の鋤跳ね返す旱かな

少年の頃、田舎の傍を流れる阿仁川で四季折々にいる魚に、釣るなり潜ったりして対面した。冬でも水に穴を開けて、スコップで雪を突つ込みかき混ぜていけると魚が浮いて来た。ただ私の近くでは鰻がいなかった、水がきれい過ぎたのか底が石ころばかりだったからであろうか。六月には八つ目うなぎが遡上して来て随分捕った。しかし夏になれば何と言っても鮎である。もう他の魚や雑魚には目がいかなかった。

鮎は一匹でも釣ると掌でしみじみ眺め、その美しい姿や形を愛おしんだ。まさに川の女王で味も一番であり、何よりもまず塩焼きで、高齢の父に食べさせたかった。そんな鮎でも季節には逆らえず、秋となれば落鮎、鯖鮎となる。登四郎先生の御句に「落鮎の黄の斑を見せて炙らるる」(落鮎にふるべき塩を手に残す)があり、先生の抒情性や美意識が感じられ、哀れさを慈しむ情のある句として心を打たれた。鮎は私にとって特別な魚である。若い時はライバルと思い、今はいかに詠めるかが問題である。